中原中也の世界

きたがわとおる
北川透

著者　北川（きたがわ）　透（とおる）

［精選復刻　紀伊國屋新書］

中原中也の世界

1994年1月25日　第1刷発行©

ISBN4-314-00635-8 C1395
Printed in Japan
定価は外装に表示してあります

発行所　株式会社　紀伊國屋書店

東京都新宿区新宿3-17-7
電話　03(3354)0131（代表）
振替口座　東京　9-125575

出版部　（編集）電話 03(3439)0172
ホールセール部（営業）電話 03(3439)0128
〒156 東京都世田谷区桜丘5-38-1

装幀　菊地信義

印刷　理想社
製本　三水舎

中原中也の世界

北川　透

精選復刻　紀伊國屋新書

目次

Ⅰ 序説——地下生活者の詩（うた）……五
Ⅱ 初期詩篇の世界——無の懸崖……二九
Ⅲ 詩の成立——様々なる試行性……六九
Ⅳ 中原中也の世界——その抒情の構造……九三
1 プロローグ——幻視への開示……九五
2 私はギロギロする目で諦めてゐた……九九
3 ホラホラこれが僕の骨だ……一〇九
4 空は死兒等の亡靈にみち……一二五
5 黑い旗がはためくを見た……一三九
6 そなたの胸は海のやう……一五四
7 エピローグ——抒情の固有性……一六四
Ⅴ 詩の不幸と批評の不幸——小林秀雄との出逢い……一七九
註記……二〇三
あとがき……二一一

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

凡例

一　中原中也の詩、評論はいっさい原文どおりの仮名づかい、旧漢字、促拗音ナミ字のままとした。

二　中原以外の著作の引用文は、おおむね原文表記を尊重したが、若干の間違いはまぬがれない。引用原典が完全なものでない場合もあるからである。

三　『　』は単行本書名、「　」は単行本でない詩や評論の題名、《　》は引用文、〈　〉は特殊用語・強調語・注意語、［　］は雑誌名、グループ名を示す。

四　《　》内の引用文中に、会話等が出てきた場合「　」を用いるが、これも原文に従うのを原則とした。

I

序説——地下生活者の詩（うた）

《国際連盟脱退？　しかたがあるまい。蘆溝橋の砲火、上海の緊迫？　これは大変だ、やっつけてしまえ！「国民精神総動員」？　うるせえな、しかし、必要だろう。防共協定？　共産党はあぶないからな。……戦争はどんどんひどくなっていく。日本は勝っているように見える。揚子江でパネー号とかいうアメリカの砲艦を沈めちまったそうだ。[註1]》　これは一人の知識人が、戦後になってから、大衆の雰囲気として伝えている一九三〇年代の初めから三七年頃までのわが国の情勢である。そして蘆溝橋事件で、中国との全面的な戦争に突入し、国民の間から軍歌がわきおこっていた、一九三七年十月、中原中也は、その三十歳の短い生涯を閉じた。その時、日本の近代の精神は一様に深刻な試練にさらされることになっていったといえるだろう。モダニストから、マルクス主義者まで含めて、日本の近代主義者がもっていた近代的な粉飾は、いみじくもE・H・ノーマンによって評された《大工業中心地の空が煤煙で暗くおおわれているかと思えば、その半面、田園や村落にはいわゆる「日本古来の精神」を愛国心や情緒の糧としているような人々が幾千万と住んでいるという奇妙な光景をわれわれは見るわけである。[註2]》　というその「日本古来の精神」を愛国心や情緒の糧としているところへ回帰していくことによって、擦り落とされていったのである。しかし、中原の、日本の近代が生活社会と触れあうところで苦悩した自意識は、そうした日中戦争以後の時代的な危機にさらされることもなく、無垢なままの詩の世界として、ぼくらの前に残されたのである。彼は、おそいくる時代の暗雲と、まったく無関係に生きながら、しかし、その感受性や詩的な思惟の中心は、時代の病質と無縁であることはできなかった、いやむしろ、それは危機に満ちた関係を結んでいたといえるだろう。ぼくらはそれ

をすでに問うところまできてしまっている。

中原中也が永眠した年の四月二十一日の日記には、次の記述が見える。《「地下生活者の手記」（ドストエフスキー）讀了。此の本は、もうこれで三度目だ。もう二度と讀まないことにする。人間は、醜悪なものだ。然るに人々ハさうは思つてをらぬ。かくて人生は、愚劣なものだ。詩の世界より他に、どんなものも此の世にあるとは思はない。》その短い生涯の終りの頃にふと書かれたこの日記の中には、ドストエフスキイの世界にいやおうもなしにひきこまれている中原の姿がある。《もうこれで三度目だ》と、それに続けた《もう二度と讀まないことにする》という強い語勢の間には、『地下生活者の手記』に強くひきつけられることが、そのまゝ反撥心ともなる中原の心理がうつしだされている。おそらくここで中原は、ドストエフスキイの〈地下生活者〉の像におのれの姿を見たのではないか。だから、次の《人間は醜悪なものだ》という感想は、『地下生活者の手記』についてのものでありながら、すでにそれは中原自身の感慨の独白なのだ。そして、この醜悪な人間の現実に無自覚に生きている人生は愚劣だという、いわば、中原の意識圏が現実圏と断絶するところに、彼の詩がやってくるはずである。続けて、《詩の世界より他にどんなものも此の世にあるとは思はない》という断言の異常さには、彼が極端な意識家として、生活社会に感ずるこの距離がうつしだされている。しかし、それは逆に醜悪な人間の現実について感じる深さでもあろう。それを距離として表現してしまうところに、中原独得のイロニーがあるというべきなのだ。

いったい中原がドストエフスキイのどのくらい熱心な読者であったかということは、彼が残した散

文や、日記、書簡の中からおしはかることは困難だが、これより三年前の一九三五年十月二十日にも次のような記述が見える。《ドストエフスキーの地下生活者の手記を讀む。――誰が、この物語の氣持を、全部的に了解するのであらうか？　尠くも私の身邊には、誰一人としてゐさうもないのであるけれど、これを讀んで面白いといつてゐる人は可なりにあるのだ。然るに自分等の日常生活に於て、此の作品の示すが如きレアリテを嘗て彼等の誰一人として見たことはないことを私は確信してゐる。もし此の物語の語られてゐると同一の調子で何か云つてみろ、みんなたゞ變な顔をするだけだ。》この語調は、これより後に書かれた先の日記のものと同一である。そこには、何か自分だけが〈地下生活者〉の側の人間であり、この物語を了解できるが、他の人間にはそれは理解できないだろうという意識がある。最後の《もし此の物語の語られてゐると同一の調子で何か云つてみろ、みんなたゞ變な顔をする》という表現には、生活社会の中原の位相が感情移入されている。つまり、生活社会にあって、〈地下生活者〉の側の人間としてものを言って、〈変な顔〉をされている中原自身の表情が、紙背にうきでてくるのである。

小林秀雄が「『地下室の手記』と『永遠の良人』」という未完の作品論を書いたのは、この中原の日記より前の一九三五年のことであり、当然、掲載された雑誌において、中原は読んでいるものと思われる。小林は、この中でドストエフスキイが十七歳の時に、兄に宛てた手紙の一節をひいて、そこに『地下生活者の手記』の萌芽をみている。それは次のように書かれている。《僕が怠け者だ、實に怠け者だといふ事は本當です。併し、完全な怠惰といふものが、この世での僕の宿命だとしたら、どう

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

すればいいのか。僕の悲しい様々な想ひが、これから先き消える時があるだらうか、僕にはわかりません。人間に與へられた精神の狀態といふものはたつた一つしかなかつた、天と地とが混淆して、人間の精神に、一つの雰圍氣を創り上げてゐるのです。人間とは法則に矛盾する樣に創られた子供だ、精神的自然といふものの法則は、既に法則とは言へないのだから。僕等の世界は、恐らく罪深い思想によつて損はれた天上の精神の煉獄の樣に僕には思はれます。《僕には、一つの計畫がある。狂者となる事。人々が發狂する、皆が寄つてたかつて治さうとする、正氣にかへらさうとする、そんな事はどうでもよい。ホフマンを全部お讀みなら、あのアルバンの性格を覺えてゐるでせう。あれをどう思ひます。自分の力のなかに不可解なものを持ち、何を爲すべきかを知らず、神といふ玩具を持つて遊んでゐる人間を見るのは恐ろしい。》[註3] ぼくは思わず長すぎる引用をしたが、小林秀雄もいうように、この十七歳の少年の手紙に、既に『地下生活者の手記』を書いた四十六歳のドストエフスキイの面影を見ることができる。しかし、ここで考えようとするのは、そのことではなく、〈地下生活者〉の原型、このドストエフスキイの十七歳の手紙のもつ精神の型が、驚くほど、中原中也のそれと類似していることである。《完全な怠惰といふものが、この世での僕の宿命だ》、あるいは《人間とは法則に矛盾する樣に創られた子供だ》、《僕には一つの計畫がある。狂者となる事》、というような精神の型において、中原は、少なくとも彼が熱心に讀み、模倣しようとしたランボオやヴェルレーヌ、さては北原白秋よりも、十七歳の少年ドストエフスキイに近いものがあるのではないかと疑ってみるのである。それを一口でいうなら、いまだ思想の形をとる以前の、混沌とした無秩序の宇宙とでもいうもの

を、内部世界に確固としてもっているということである。このことは、たとえばドストエフスキイについて語られる際に、小林秀雄の作家論に見られるような〈ドストエフスキイの生活〉が語られねばならないといった特質と、中原中也の詩が語られる際に、必ず、あの昭和初年代の一種異様に無秩序な青春像とともに、無頼な中原の生活が語られるといった特質の類似について言おうとするのではなく、まだ、思想の形をとるまでにいたらない精神の原型における、秩序への背理の志向についての同一性を言おうとするのだ。《人間とは法則に矛盾する様に創られた子供だ》という、その子供の無垢がもつ狂気を、中原は〈地下生活者〉のうちに嗅ぎとり、そこに共犯者めいた自分を見出していたのではないかと思うのである。しかし、その中原の狂気が、軍歌がわきおこってきていた一九三〇年代の日本の生活社会において、思想化する契機をもたずに、苦しいうたとなっていったのはなぜかというのが中原のもつ問題である。

ドストエフスキイは『地下生活者の手記』をチェルヌイシェフスキイの社会主義的小説『何をなすべきか』の進歩的合理主義に対して、人間意識の不合理性、その自由な存在の奥深い提示として書いたと見ることができる。中原中也にも、確かに、現存の世界の対数表に記されている理性と論理の合理主義が支配する秩序に抗して、意識の自律性におもむこうとする志向がある。人間が愛しているのは、小市民的な安泰ばかりではない。苦難だとて安泰と同じように、いやそれ以上に愛する——《人間は眞の苦悩を、つまり破壊と混亂を決して拒むものではない》[註4]——ところの自由な存在だという地下生活者の声が、中原の詩の背後から、遠い海鳴りのように聞こえてくるのである。中原の詩を、日

本の近代というものの上昇性から、どうしようもなく脱落せざるをえなかった、そしてそれを病質として受感せざるをえなかった〈地下生活者〉の詩として見ることだってできるはずである。

中原はすでに一九二七年（二十歳）十一月十三日の日記のなかで、《私は生活（對人）の中では、常に考へてゐるのだ。考へごとがその時は本位であるから、私は罪なき罪を犯す。（それが罪であるわけは普通誰でも生活の中では行爲してゐるからだ。）（考へごとは道德圏外だから）そして私の行爲は、唯に詩作だけなのだ。多いか少いか詩人（魂の勞働者）はさうなのだが、私のはそれが文字通りで、滑稽に見える程だ。》と書いている。魂の労働者というような語彙を彼がもっていることに驚かされるが、ここに見られるように中原は、生活（対人）圏のなかでは絶えず、脱落感をもっていた。それは、人は生活圏のなかでは行為するのみだが、自分は考えているからだという強力な自意識に根ざしている。つまり、生活圏や対人関係のなかでもたされる秩序の意識（道德感）の網の目を、生の自然性として受け入れ、順応していくことができれば、生活者として不足ないといえるが、彼はそこでも考える（＝自己意識の秩序をもつ）から、どうしてもそこから落下せざるをえない。そこに、先ほどの少年ドストエフスキイの手紙にあった《完全な怠惰といふものがこの世での僕の宿命だ》という自己規定を折り重ねてみることができる。人が行為のみをする生活圏のなかで考えるということは、実は、その生活圏における道德に照らせば、怠惰ということであり、不平家であるということだからだ。そして、考えるということは道德圏外に出ることだというどうしようもない断絶感を一挙に埋めるために、中原はうたったと思われるのである。阿部六郎に与えた「つみびとの歌」が、その中原の落差がどこか

らくるかを暗示している。

わが生は、下手な植木師らに
あまりに夙く、手を入れられた悲しさよ！
由來わが血の大方は
頭にのぼり、煮え返り、滾(たぎ)り泡だつ。

おちつきがなく、あせり心地に、
つねに外界に索(もと)めんとする。
その行ひは愚かで、
その考へは分ち難い。

かくてこのあはれなる木は、
粗硬な樹皮を、空と風とに、
心はたえず、追惜のおもひに沈み、
懶懦にして、とぎれとぎれの仕草をもち、

人にむかつては心弱く、詔ひがちに、かくて
われにもない、愚事のかぎりを仕出來してしまふ。

（「つみびとの歌」）

この詩には、事実はどうであれ、ともかく中原が、生活圏からの脱落感の原型をどこに求めていたかが暗示されている。すなわち《わが生は、下手な植木師らに／あまりに夙く、手を入れられた悲しさよ！》であり、この下手な植木師は、少年時の環境のうちに見出されているのである。中原は、少年時を回想した小説風の文章を幾つか残しているが、それらは、両親を中心とするまわりの人間関係への激しい違和を、異様な冷静さで記述していることで注意をひく。たとえばどこにでもある父と子の相剋も、中原の場合、世間尋常ではない。それは「その頃の生活」という文章では、次のようにスケッチされている。

「お父さん、今から近所に遊びに行つて來ますよ。」
「またそんなことをいふ。一度不可ないつたら不可ない。」
父は私の小さい時から、内から外へは出來得る限り出さなかつた。外から來る子供だつて大抵は追ひ歸してしまふのであつた。
「此の近所に一軒だつて上品な家はない。みんな下層民の寄り集りぢやあないか。」

（「その頃の生活」）

これは子を憎んでするのではないのだから、父の愛は異常な性質をもっていたといえるだろう。父は医者だから一日中家にいて、子の動静をうかがっている。子が外に出て遊んだり、あるいは近所の下層民の子が来て遊ぶのを許さない。子は強いられた愛に囲まれて、始終、家のなかで早熟な意識を育てるほかないのである。そしてまた終日家にいて、子は、この父と母の夫婦仲にひそむ不和をも鋭敏に感じている。この父はまた溺れるのを恐れて、水泳をも禁止したと言うが、事実としてはどうであれ、後年このように書きとめる中原の意識のなかで、それらが重要な意味をもっていることは確かである。その時、彼は対人圏のなかで脱落感を覚えるたびに《心はたえず、追惜のおもひに沈み》、そして、下手な植木師たちと回想される対象に、思いをむけるほかなかったと考えられるのである。大岡昇平の評伝『朝の歌』にも触れられていることだが、中原は、山口中学三年時の大正十一年八月と十二月に、〈思想匡正〉の意味で、大分県豊後高田の東陽円成師の経営する真宗の寺におくられ、帰宅後もしばらく念仏を唱えていたという。この〈思想匡正〉が具体的に何を意味するのかは定かでないのだが、その頃すでに中原が両親の手におえない反抗児になっていたのではないかと推測されるのである。そして中学入学時には、席次八番の成績優秀な彼が、中学三年時の、寺へ行った翌年の三月には落第し、京都、立命館中学に転校を余儀なくされるのである。そこで、いってみれば、完全な怠惰こそは、彼の宿命となるのであり、このようにして両親や周囲の強い期待は裏切られていくのである。下層民の子とのつきあいを禁じた父の愛は、ここで子の復讐を受けることになるわけだが、その時に

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo